

研究所
だより

モニター会議概要

現地モニター（敬称略・五十音順）

●美瑛町 内田 達也

（JAびびえい青果課）

●天塩町 宇野 剛司

（酪農経営）

●新篠津村 大塚 早苗

（有機野菜・畑作・稲作経営）

●美唄市 貞広 樹良

（稲作・畑作経営）

●京極町 高木 智美

（畑作経営）

●音更町 津島 朗

（畑作経営）

●名寄市 中野 康則

（稲作・野菜経営）

一般社団法人 北海道地域農業研究所

●副理事長・所長 坂下 明彦

●専務理事 近藤 好弘

当研究所では、現地の実態を的確に把握し業務推進に活かすため、新進気鋭の農業者に現地モニターを委嘱し、さまざまなご意見をうかがう場を設けております。

本年度は、令和二年十一月十七日にコロナウイルス感染予防のため、リモートでの意見交換を行います。以下その概要を紹介いたします。

近藤 令和二年度のモニター会議にご参加いただき、ありがとうございます。七月より専務を務めております近藤です。皆さまとは初対面で、画面を通してしかお会いできないのが大変残念ですが、よろしくお願いいたします。

本日は、初めてのオンライン会議で慣れない部分もありますが、皆様から営農状況や地域の情勢等いろいろなお話をお聞かせいただければと思います。進行は坂下所長にバトンタッチいたします。

坂下 本日の話題の一つ目は、自己紹介を兼ねて皆さんの今年の経営状況やトピックについてお話いただき、二つ目にコロナの影響についてお伺いします。もちろん悪い影響もたくさんあると思いますが、こういう状況の中で都市とは違う生活様式の農村だからこそできる、という積極面の話もお聞かせいただければと思います。また、最後に地域農研への



宇野剛司さん

要望についてもお願いします。
 それでは初めに経営の概況について、
 宇野さんからお願いたします。

宇野 私の牧場では、今新しいシステムの開発をしています。労働力を削減できるようにと、札幌の(株)インディテール(INDETAIL)とジョイントのベンチャー企業と組んで、ドローンを使った草地管理のシステムを開発中です。そのシステムというのは、まずドローンを自動で飛ばして草地の写真を撮り、その写真をもとにAIが牧草の生育状況である草の生

えている
 密度、伸び具合などを判断し、今ちようど牛が食べ頃だとか、

まだ伸びが足りないなどを何段階かで携帯のアプリに表示し、携帯で全ての草地の状況が管理できるというものです。今は僕が毎日草地を見ながら目見当で判断していますが、それをAIがやることで、僕が判断する以上の正確さで、素人の方でも簡単に草地の状況を把握できます。酪農をやる上で、搾乳は今ロボットという手段があり、次に放牧の草地管理という非常に大きな課題だったところをAIでやるということです。来年には(株)インディテールさんと合同会社を設立し、最終的にはその会社でシステム開発と牧場運営を始めようという話を進めています。

坂下 そのシステムは採草のタイミングもということになるのか、それとも放牧だけなんでしょうか。

宇野 ニパタン用意しまして、採草での草地の基準と放牧での基準のどち

らでも対応できるように作っているところです。また、ドローンの映像から、葉色で窒素やカリが足りているかといった判断もできるようになると思います。その草を食べた牛がどういいう牛乳を出すかというデータを後々集め、この草を食べた牛はこういう牛乳を出す、という裏付けを将来的に全てデータで出せるようにしたいと思っています。

坂下 そうすると牧区も、牧草をそういう仕組みで区切ってやっていくというようなことになっていくのでしょうか。

宇野 そうですね。牧区ごとの写真をAIが判断し、一つ一つの牧区の状況をデータで判定します。

坂下 ありがとうございます。非常に新しい動きについてお話しただきました。それでは大塚さんお願いいたします。

大塚 新篠津村で有機農業をしています。大塚ファームの大塚です。二二品目の有機野菜を作っていますが、冬は栽培したサツマイモで干し芋を作っています。また今時期は、大根で切り干し大根を作っています。

今年の大きなトピックとして、農福連携の認定をいただきました。以前からB型支援施設の方に野菜、パックのシール貼りや、加工品の箱詰め作業をしていただけでしたが、今は三箇所の障がい者施設から、毎日畑仕事に来ていただくようになりました。草取りやミニトマトの収穫、今の時期はハウスのビニールの結束作業などです。初めは、私たちが障がい者の方に直接指導するものと思っていましたが、専門のコーディネーターさんを通じて仕事を指示する形態なので、ほぼ手はかからない状態です。我が家は有機野菜で多品目ということもあり、人手がないとどうにもならない仕事なので、

彼らが来てくれて非常に助かっています。来年もミニトマトのハウスをさらに九棟増やし、拡大していきたいと思っています。

新篠津村は割と後継者のいる農家が多く、なかなか土地が空きません。ずっと同じ土地面積であり、その中で収入を上げていかなければならず、必然的にハウスを増やすということになってきました。そのためにたくさんの人手が必要なのですが、障がい者の方々に非常に助けていただいています。先ほどスマート農業の話が出ていましたが、今一八haの土地のうち半分では米を慣行で作っているのですが、その農業散布は業者依頼のドローンでやっています。また、田植機も自動操舵に更新し、少しずつ新しいものを入れてきています。

坂下 農福連携は今、全国的にも力を入れていて、コンテストのようなことも始めているという話です。やはり、有

機農業は人手がたくさん必要で、働く時期をのばすことや障がい者の人も一緒に取り組むというのは、経営としてもぴったりに感じですね。ありがとうございます。

それでは美唄市の貞広さんお願いいたします。

貞広 昨年は基盤整備が一〇haくらい入っていましたが、工事も終わり今年には作付けができるようになりました。水稻を二七ha作付けしましたが、春先は忙しくて大変でした。ちょうど今年から北海道ベースボールリーグが立ち上がり、



貞広樹良さん

美唄ブラックダイヤモンズという球団が地元でできました。本

州や道内各地から選手が集まり、この選手たちが午前中だけ地元企業、農場、農家で働き、午後から野球の試合や練習をするのです。我が家でも四月から九月は午前中アルバイトに来てもらい、とても助かりました。

今年は天候が良かったこと、また作付ができる面積が確保できたこともあって、コロナの影響で落ちている部門はありますが、水稲は最終的に平年並みの収入になりました。

坂下 去年の基盤整備一〇haというのは大区画化ですか。

貞広 だいたい一枚が二ha前後です。今まで水管理も結構大変でしたが、今はバルブをひねればすぐ出るようになりました。

坂下 野球と関連付けて外から人が

来るというのは興味深いですね。ありがとうございます。

では高木さんお願いいたします。

高木 京極町で畑作経営をやっている高木です。主に馬鈴薯、人参、小麦、大豆、小豆を栽培し、夫とアルバイトとで営農しています。私自身は小豆に力を入れていて、白小豆の「キタホタル」の商品開発をこれから冬にかけてやっていこうと考えています。

例年、秋から冬の農閑期にはいろいろな方の前でお話しする機会を頂戴しています。去年の一二月には、酪農学園大学の学生さんに「農家のお嫁さんの一日の過ごし方や年間スケジュール」のお話をし、また、農業者や札幌の消費者の方たちに向けてお話をする機会もいただきました。その農業者向けの場では「経営者が亡くなり女性だけになってしまった場合、皆さんは農業を続けますか」という



高木智美さん

問いを投げかけてみました。私自身も実際に営農計画を立ててみて、その大変さなどに気づ

かされたからです。夫が亡くなった場合、自分だけでどれだけの面積を維持できるかなど、結構細かく農協の営農課の方と話し合いをしました。一回目は、「それじゃできないね」と言われて突き返されてしまい、旦那さんの存在は大きかったんだなと感じさせられました。

自身の営農面については、今年の秋からはとても天候が悪く、収穫作業に苦勞しました。特に豆類が刈れない状態が続き、一一月の頭にやっと終わりました。今は後片付けをしているところですが、コロナの影響であまりよくわからない

年だった気がします。

坂下 白小豆の商品開発について、どんなことをやっているのか教えていただけませんか。

高木 一番やりたいのはジャムを作ることです。今までは、お菓子メーカーの商品になっていたので自分の販売権利はなく、ちゃんと販売権利を持った商品の一つ作りたと思っています。

坂下 ありがとうございます。それでは津島さんお願いいたします。

津島 音更の津島です。今年は春から気温も高く干ばつ気味だったため、五月末から六月に播いたスイートコーンの一部が発芽不良となり、7haほど廃耕にしました。これまで北海道では冷湿害に対して気をつけ、播種作業も乾いてから

播くのが普通でした。しかし、近年では春から非常に高温状況が続くようになり、今はいかに乾かないうちに播種するかが課題になっています。

コロナの関係では、会議や研修会といった集まりが全くなくなっていました。会議がない分仕事ははかどり、ほとんどの方が作業はとも順調だったと聞いています。でも、雨が降らないので河川に近い流域の畑で焼けるようなところは非常に作柄が悪くなっている。そういう状況が昨年と今年続きました。

また地元の小学校も今年の春閉校してしまい、若い人たちが集まる機会も減ってしまいました。農村の良さには、人と人との触れ合いのようなことがあると思います。コロナが長引くと、こういう生活が当たり前と思う人が増えてしまい、人と人との繋がりがどうなってしまうのか心配しています。

作業が順調だったことやイモの作付けを休んだこともあり、畑仕事は機械と家族だけでまかなえるスタイルでありましたが、非常に楽で、そういうスタイルでどのように農業をやっているか考えているところです。また、秋口にコンバインで豆の収穫作業で指を怪我してしまい、やはり健康が第一と感じました。夏は農作業に極力集中して、冬場は旅行に行ったりフレッシュしたり、勉強にあて新しい知識と技術の習得の機会が作れば理想かなと感じています。

地域の営農情勢では、特別契約の小豆で二才積みをやっている人たちが大豆の契約栽培をやっている人たちが、作業が大変だから作付けを減らしたり止めたりという傾向が出てきています。でもそういう人達がいるということは、逆にそういうニーズもあるのだという気がしています。

坂下 津島さんのところは、面積はどのくらいですか。

津島 今は一〇haです。

坂下 そんなにあるんですか。ありがとうございます。

それでは中野さんお願いいたします。

中野 私は神奈川の茅ヶ崎から平成十一年に北海道へ来て、平成一五年から独立就農し今年で一七年目になります。はくちょうもち一〇haとミニトマトを五〇mハウス六棟で経営しています。今年は天候が良く、はくちょうもちも名寄平均で一〇俵を超えていると思います。ミニトマトはコロナの影響で値段を心配していました。業務用の方はダメでも小売りの需要が強かったことから値崩れはなく、経営上は悪くない感じでした。

先程宇野さんのスマート農業の話があ

りましたが、水稲もドローンで防除していて、今年からはほぼ完全自動化となり、見守っているだけで良くなりだいぶん楽になりました。ドローンはこれからこういう形になっていくのかなと思っています。

坂下 ドローンの防除は、何戸かの共同利用組織でやっているのですか。

中野 だいたい三戸くらいで利用組織があります。私は自分のところ一〇haと、あと二人は二〇haから三〇haやっている人たちでチームを組んでいます。自動化でスピードも速くロスも少ないので、ドローンの防除はこれからますます増えていくのではないのでしょうか。

坂下 ありがとうございます。それでは最後に内田さんは農協にお勧めですが、地域全体のお話とか農協の中での取り組みなどについてお話し願います。

内田 私自身は今年馬鈴薯担当へ異動になりました。農協全体での大々的なトピックも、今年は特にありませんでしたが、津島さんがお話ししていたように、本当に会議が何もできなかった一年でした。品目ごとの話では、販売面から見るとコロナの影響を受けた品目は多々ありました。ただ収量的には農産、青果ともに豊作基調の年だったと思います。

坂下 ありがとうございます。皆さんのお話の中でいろいろ新しい動きが出てきているなと思いました。特にスマート農業では、米の防除もずいぶん変わり、酪農でもいろいろ変わってきたなと思います。

次にコロナの影響についてお聞きしますが、先ほど津島さんが、農業の良さがなくなってしまうようなことを話されていました。直接販売や労働力の調達の面においては、人との接触がまずい

ということなどでコロナの悪影響を聞いています。しかし、大変だという話ばかりではなく、世の中が困っている時でも農村にはこういう良いところがあるという話も是非お聞かせいただければと思います。もう一度宇野さんからお願ひします。

宇野 天塩町はまだに感染者が出ていません。二月から五月頃も町に出てもさほど変わらず平和な状態でした。警戒して人が出て歩かないという状態ではなく、それほど警戒心もなかったかなと思います。ただし、近くの町村で感染者が出てきてからはシビアな感じになってきて、札幌など他の町へ行くだけでも厳しい目で見られていることが今は伝わってきます。なので、ある一線を越えたら非常に居づらくなるのかなと思います。

坂下 なるほど。では次に大塚さんいかがでしょうか。

大塚 コロナの件で一番影響を受けたのは人手かなと思います。これまで外国人技能実習生三人とタイ人の留学生四人に夏場四カ月きてもらっていましたが、その七人が皆入国できませんでした。本当にどうなるんだろうと思いましたが、一方でコロナの関係で人を休ませている会社もありました。その一つが「白い恋人」の石屋製菓さんです。石屋製菓さんは五〇〇人以上のパートさんを全員休ませており、その方達を農業の方で使ってくれないだろうかという話を北海道農業法人協会にいただきました。そこで札幌近郊の農業法人一三社ほどで、パートさんの引受けと社員研修という形で一社に二〜三名ずつ、一カ月交代で延べ一〇人

の方の研修を受け入れました。さらに、こちらでもコロナの影響だと思いますが、パートさんや社員も結構応募があり、バタバタと人が入ってきてくれて、外国人が来られなかった穴は埋めることができ

ました。不慣れな方ばかりで大変でしたが、なんとか今年の営農はできました。

私も外にいろいろ役職を持ち、夫も地元の村の議員をやっているのです、元々出かける用事はすごく多かったです、それも今年は全然なく、出かけないことはこんなに楽なのかと思いました。息子

たちも学校が休みですと居たので、ずいぶん仕事が進みました。そして、家に居ながら外部の用事ができるという環境が、このコロナでいろいろ整ってきたと思います。打ち合わせもズームで済ませるようになりました。今大塚ファームで取り組んでいることは、会計関係を全部



大塚早苗さん

クラウド化するとか、銀行などの入金を出す、ネットバンク

ングで済ませるとか、それらの作業になるべく時間をかけず家の中で完結させるように取り組んでいます。

坂下 なるほど。都会だと普段でない親父が昼からゴロゴロしていたり、子供がいたりということで仲が悪くなったという話も聞きますが、そういう意味では農村というのは、皆ではないかもしれないですが、住環境が良いということもあるのでしょうか。

大塚 スタッフについては寮があるので、訳あって家に泊める子もたまにはいますが、インターシップの人がうちに泊まることはあまりありません。私の子供たちは小さい頃から農作業を手伝っていて、素人以上に仕事はできるので家にいると無茶苦茶助かります。

坂下 そうですか。ちょっと良いお



坂下所長

出てきていますので、そういう面も含めて生活の改善が少してきてきているのでしょうか。

では次に貞広さんお願いいたします。

貞広 我が家も春先の忙しい時期に子供たちの学校の休みが重なり、小学生ですが結構仕事の手伝いをしてもらい、また、家族が働いている姿を見せられたということも子供たちにとって良い経験となったと感じています。

例年六月から九月は修学旅行生の体験学習として関西から受け入れていました

話が聞けたかと思えます。環境問題からも車にあまり乗るなという話も

が、今年はゼロでした。修学旅行生とは体験学習とともに一緒に食事をしながら会話するというのも目的で来ているので、この状況が続くと来年もちょっと難しいのかなと感じています。

坂下 グリーンツーリズムの話は美唄単独ですか。それとも滝川などと連携してですか。

貞広 両方やっていますが、修学旅行生については滝川からのつながりです。

坂下 そうですか。観光ではないけれども、そういうことも人の動きということで影響が出たのですね。子供さんに農業の魅力を伝えるという意味ではいい機会だったのでしょうか。

貞広 そうですね。その他では、ソバの価格が昨年の五分の一くらいになり、

ここまで下がるのは初めて経験しました。米は逆に家庭の消費が増えたこともあり、販売は少し伸びた状況でした。

坂下 それでは次に高木さんお願いします。

高木 我が家も、前の方たちと同じで、子供の助けがすごく多かった年でした。そして、コロナ禍の支援対策である持続化給付金、高収益作物次期作支援交付金、経営継続補助金の三つを申請しました。経営継続補助金に関しては締め切りまで時間がない中で、説明会を開いてくれたところ、またファックスだけだったところもあったと聞いていますが、農家の人も常に勉強しておかなければいけないなと思いました。高収益作物次期作支援交付金は見直しということになったようですが、これら三つの補助金申請に関しては自分としても大変勉強になり、

コロナの関係で特に強く感じた点です。その他大きな問題として、自分のところではお米は作っていませんが、農水省が出した二一年産主食用米の適正生産量が今年より五六万ト減というのが出ていました。米農家さんは大変だなと思いましたが、いろいろな意見がSNSで発信さされているのを見ると、米農家さんにも二通りいるなと感じました。米は国に守られて当たり前という考え方と、米が作れなかったら初期投資をなるべく抑え小麦や大豆に転作をしてという前向きなチェンジを考えている方とです。自分は意見を出せないけれど、お米に関してはこれから非常に大変だなと思っています。

坂下 生活面の方はどうですか。

高木 京極町内ではなるべく人と接触しない形でのイベントをやっています。観光スポットの「ふきだし公園」ではス

マホをかざしてARでスタンプラリーを開催したり、フォトコンテストだとかです。ね。

坂下 ありがとうございます。では次に津島さんお願いします。

津島 生活の面では、通夜、葬儀とも後ろの遠いところで線香をあげるスタイルでの評判が良く、ひよっとするときはたりが変わってしまうのではないかと気がしています。その他地域活動も春祭り、秋祭りが全て中止になりました。



津島 朗さん

地域の人が集まることで人と人が助け合うペースができていくような

ところがあったのに、どうなってしまったのだろうと思う反面、集まりを呼び掛けられているグループは、何もなくてすごく楽という人たちもいて、人に触れ合いたくないから農村にきているという全く真逆な世界も存在していて、そこが心配しているところです。

先ほど貞広さんの話にもありましたが、私のところもNPO法人を立ち上げて民泊受け入れをやっていますが、今年は中止です。先日の会議で、ワクチンもできないうちでは来年も中止で、次は再来年だという話をしています。事務局も人が来ないので営利上続かず、維持できないと言っています。農村というものを子供達に伝えたいという思いはあっても、経営が成り立たなくて大変だなと感じています。今まで十一年民泊をやってきて、十勝でようやく二、〇〇〇人オーバーの高校生を受け入れるところまで来たのに、コロナ禍になってしまった。これを二、

三年休んでしまうと、また振り出しとなり、数百人のところからどうやってPRして広げようかという悩みが始まりそうです。

あと本業の作物についてですが、本年度は作況的にどの作物もやや豊作気味でありました。一方需要は落ち込み、小豆を代表するように在庫を抱えて価格が下がりました。今のところ小豆の在庫は一三カ月分位になりそうだと聞いています。商系は在庫を抱えて買わないようになっており、今年の豆類は農協にもものすごく集まりました。ただ売れるまでは現金化できず、これから大変であります。実は小麦も在庫が増えています。小豆、小麦、そして砂糖も売れていないということで、これから来年にかけて価格を含め様々な問題が出てくると思います。先ほど経営継続補助金や持続化給付金などの交付金の話が出ていましたが、それは今年を乗り切るためのお金として出ています。今

年はいいでしょうが、何らかの在庫対策にかかる政策がなければ来年、再来年につながらないと思います。飼料になるものは飼料に、輸出できる物は輸出するなど、あらゆる手法を考え在庫調整していけば価格も通常に戻り、生産現場も安心して生産が継続できるのです。少し無茶な話もしましたが、それほど厳しい情勢です。

坂下 コロナ禍による深刻な実態やご意見を頂きありがとうございます。それでは中野さんお願いします。

中野 私は一年前にゲストハウスを作りました。水田をやっていると籾播き・田植えに一番人手を使いますが、近くではなかなか集まらないので、ゲストハウスに東京から人を呼んでいました。一昨年はコロナの影響で全員来られなくなっ



中野康則さん

しまい、小人数でなんとかやりくりという感じでした。コロナ前の地元の観光協会のイベントで、インバウンドの人を連れてきた旅行会社が、ワーケーションというものを農家の人は、どんどん考えた方がいいと言っていました。先ほど皆さんも言っていました、コロナ後を見据えてそういうこともやっていくといいのではないかと思いました。

米の値段は一定でしたが、ミニトマトについてはコロナの時に小売需要が結構ありました。先ほど大塚さんがハウス九棟増やすと仰っていましたが、この先も

ミニマト
トの需要
は結構あ
るよつで
私も増や
すことも
頭に入れ
ようかと

考えています。小売りの青果の人たちに話を聞くと、売上一五%プラスだということですね。

坂下 トマトは割と価格が高止まりしている感じですね。

中野 そうなんです。うちのミニトマトは農協経由で東京の方に出しているようですが、すぐなくなると言っていました。

高木 ちょっとお聞きしたいのですが、緊急事態宣言で給食がストップとなった時は、春掘り人参が真っ盛りで、人参も高くなるのかなと思っていたら全然安いままで、家庭内消費では高くならないんだと思いました。緊急事態宣言が解除され、給食や外食が動き出してからは、価格はものすごく上がりましたが、その時トマトはどうだったのですか。

中野 小売りも売れるものと売れないものがあつたようです。その中でミニトマトは結構売れていたと聞いています。うちでは業務用のトマトで「サンマルツァーノ」という、イタリア料理の煮込みで使う品種を作っていましたが、それは全くだめでした。業務用向けのものは、やはりダメだったという話です。

坂下 外に出ないから本当に家庭内で作っているところと、都会だと単身世帯も多いので、すぐできますタイプの通販利用があつたりしているので、家庭用需要がストレートに上がったかというところでもないようにも見受けられました。

ありがとうございます。それでは内田さんいかがでしょう。

内田 私も、本来は生産者の所へ行き、営農指導や集荷業務にあたるのですが、それも控えざるを得ず、生産者との



内田達也さん

交流がいつもより少なくなりました。農協自体も交代出勤でしたが、トマトが始まる五月から六月には、選果場でパートさんが一〇〇人体制となるので、そのコロナ対策だけでも結構大変でした。

販売面については、やはり業務用、飲食店関係の売りが弱く、品目で言うと加工品目、豆、米、ゆり根などは影響を受けました。特に、ゆり根はあまり家庭内で消費されず飲食店で消費されることが多いので、結構ダメージがありました。野菜、野菜関係については、中野さんが言っていた通り売れ行きはよかったです。トマトについては、kg単価が逆に良い年でした。

高収益作物次期作支援交付金については販売部が窓口ではありませんでしたが、説明会など申請のための取り進めに大変苦労していました。

坂下 いろいろお聞きしましたが、やはり日本中が大変なこととなり、農家農村だけには良い面があらわれているわけでもないということが改めてわかりました。ただ、春先に子供が家にいるという珍しい状況が生まれ、農作業の手伝いをしてもらいよかったという話も多くありました。大塚さんからは、出かけなくてもすませられるスタイルを見直す機会ができたという話がありました。これから皆がそれらについてどう取り組むかが大事なと思います。

グリーンツーリズムは水田から始まり、畑や酪農の方へもかなり時間をかけてどんどん広がっていきました。これからは修学旅行生中心から長期滞在者向けなど、

いろいろと発展させていこうとしていた矢先に止まってしまい、農村の観光面への影響を懸念しています。

二〇二〇年一二月で地域農研も創立三〇年を迎え、その区切りとして今取り組んでいることは、北海道の農協の歴史を取りまとめて発刊すること、ホームページを新しく使いやすいものに更新することです。それらの取り進めに関わることもかまわないですし、最後に地域農研に対する要望等についてお願いします。また宇野さんからお願いします。

宇野 農協の歴史というのは私も非常に興味があります。昔という経緯で農協組織ができたのか、その後販売や金融などができていますが、本来の農業協同組合の意味が現段階の農協を見ている限りでは非常に見えにくい状況になっていると思います。本来の農協の意義がわかると、農協への愛着というか、見方を

変えられるかなと思いますので、その点を楽しみにしています。

津島 今回コロナになり、その中で仮に農協がなければどうなっていたらうという推測をやってみても面白いと思います。現状では、農協は農業者の団体だから、在庫として抱えることになっても全て買い取り、今年の農家経営が成り立つようにしているはずです。また、過去の大凶作で収入がない時には農協はどういう取り組みをしてきたかという話もするべきです。農協がなぜ必要だったかという話はここからきているので。最近は大きな問題もないため、農協ってどうなの、農協って必要なのという話まで出てきていますが、実は農協があるからこそいろいろな人たちが自由にできている部分もあるのです。農協は強制するところでもなく、いろいろな人に自由な部分がありながら農協運営していますが、本

来の農協の意味は何なのかをわかり合うことが必要です。農協の人が、「農協は必要ですよ」と言っても何の説得力もないので、地域農研が第三者的にわかるように発信してくれた方が良いのではと思っています。

坂下 ありがとうございます。歴史的にみると大正二年に大凶作があり、その後に農協が生まれたという経緯がありますので、私も勉強しながら発信させてもらおうと思います。

それでは中野さんお願いします。

中野 私は新規就農であり、農業を始めた時は農協に大変お世話になり、農協がなかったら今の私はなかったと思います。津島さんが言われた通り、農協の歴史は農業者の歴史であり、一般の人にもそういうことをわかりやすく伝えていただきたい。マスコミの話を一方向的に信

じて、実際には農業のことも農協のこともわかっていないのが現状なので、是非ホームページをリニューアルする時はそういうことを分かりやすく載せたほうがいいと思います。農家の人がみる農協、農業に関係ない人からみる農協は見方が違っていると思うので、認識の差があまりに大きいのはよくないと思います。

坂下 良い助言をありがとうございます。内田さん、いろいろ言われていますが、農協の職員ということで何か一言お願いします。

内田 私も農協に入ってまだ一〇年あまりですが、新規就農者もいますし、皆さんに農協の歴史を知ってもらい、よい関係性を築いていけるような発信をしていただきたいと思います。

坂下 それでは最後に大塚さんいかがでしょうか。

大塚 現在、家族経営の農家では後継者がいないということでごんごん離農しています。なぜ離農するのか、なぜ後継者がいないかという理由の一つに、両親たちが、農業をやっても良い生活はできないので、しっかり勉強してサラリーマンになれというような教育をしているせいもあるのではと思っています。そのようにならないよう、農家が良い経営をできるよう農協には頑張ってもらいたいと思っています。後継者育成でも、例えば息子がちゃんと結婚できるように教育する、はたらきかけることを農協にもやってもらいたいと思うことがあります。後継者がいなくて離農するところを後継者がいるところが買うのでごんごん経営規模も大きくなっていますが、実際はやりきれないという現状もあります。そ

こで国や道が考えているのは協業法人化だと思えますが、農協はそれについてどう対応を考えているのかが気になります。家族経営はこの先もごんごん減っていくのは目に見えています。それを協業法人化という形で、地域でやっていくということが、これからの北海道農業の行く道だと農協も考えているのか、それであるのかという疑問が少しあります。

坂下 ありがとうございます。調査の中で、農家の数と農協職員の数にあまり差がなくなってきたており、農家と農協が一緒になることもあるのではということを考えてもしました。何か今までと違う新しい組み立て方をしないと、今まで通りのベクトルでやっていけば何かなるということではないと皆さんも考えておられるのを感じます。
ズームで行ったわりにはいろいろお話ししてただいて、私としては大変嬉し

く思っております。最後に専務からご挨拶申し上げて終わりにしたいと思います。どうもありがとうございます。

近藤 皆さん大変お疲れ様でした。多様な意見、実態の話が聞けて本当に勉強になりました。ありがとうございます。

地域農研はいかに地域の農業を振興していくかというミッションがあるわけ、この事態にどう我々が貢献していけるのか考えていきたいと思っております。これからも忌憚のないご意見・ご指導をいただきたく、



近藤専務

今後ともどうぞよろしくお願いたします。